

日本の近代化と絹織物産業（I）

—「生糸」「きもの」取引に携わった商人の活躍に関する一考察—

A Study of Japanese Modernization and the Silk Industry (I)

—The Emergence of New Japanese Merchants—

廣田 政一
Masakazu HIROTA

Abstract

“Kimono” is Japanese traditional dress, made of high quality silk. When Japan opened its exports in the 19th century, Japanese silk suddenly found an enormous overseas demand. This silk boom greatly stimulated silk production and spread all over Japan. The purpose of this study is to examine the Japanese modernization through the silk industry, particularly focused on the role and activities of three types of new Japanese merchants. These merchants emerged on the marketing channel from (1) the local silk purchase from silk-producing localities, (2) the trade negotiations with foreigners to export it from Yokohama through Japanese Silk Road (Hamakaido), and (3) local sales of silk weaving products (Kimono). The silk export by Japanese merchants aided modernization through government requirements to establish a stable resource of foreign exchange for Japan as a leading exports commodity.

Keywords : silk export, new Japanese merchants, Kimono, Japanese ,silk road (Hamakaido)

キーワード：絹輸出、日本の新興商人、きもの、日本のシルクロード（浜街道）

〈目次〉

はじめに

第1章 絹織物産業の概観

第2章 製糸業

1. 長野県岡谷市

2. 群馬県富岡市

第3章 絹織物産業と商人

1. 日本のシルクロードと生糸商人

2. 織物買継商（買継商）のきもの取引の活動

3. 生糸売込商人（売込商人）の貿易活動

第4章：現在の絹織物の流過程

おわりに

はじめに

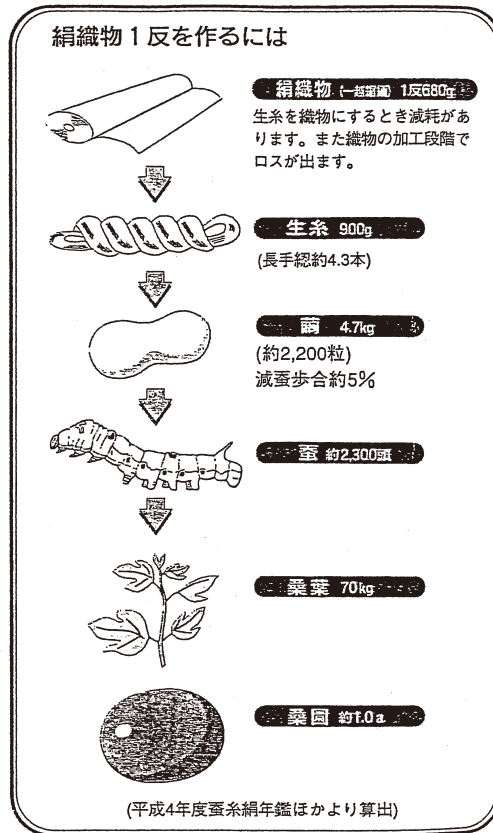
〈本論文の目的と背景〉

最近日本の「きもの」離れがみられる^(注1)。社会構造や伝統文化の認識の変化や所得向上による消費構造の変動によるものと思われる。日本の近代経済史の中で絹織物産業の役割は大きい点は否定できない中で、幕末・明治における生糸取引や絹織物生産と販売の構造の変化を洞察することは大変に意義がある。特に、今回の基本調査に関する論文では生糸・絹織物の流通過程で商人の活動と役割を明らかにする。3つのタイプの商人が活躍しているが、先行文献では近世・江戸期の論文が多く、岩崎(2010)は八王子の縞買の動向、松石(1993)は富岡周辺を中心とした絹商人と絹流通、長谷部(1982)は奥州信達(福島県)の生糸買次商人について記述され、又、各商人の役割についての調査研究は事例を挙げた深い洞察が見られるが断片的に触れているに留まり、今回のような各商人の比較に基づく総合的かつ体系的な論文は見当たらない。ここに論文のユニークさを見ることができる。当初は幕末・明治から現代までの絹織物産業の発展について大局的に記述する計画であったが、資料や文献の制約などにより分割し、戦後の絹織物産業の発展の盛衰に関しては、日本の近代化と絹織物産業(2)として次回に記述することとした。但し、今回の研究には2年間に及ぶ現地調査の成果が反映されている。初年度の平成22年度には、主に東北・関東・北陸を踏査した。十日町、富岡市(富岡製糸場)、米沢、桐生、足利、八王子、横浜、福井、小松の各地で絹織物関係団体や工場、行政当局を訪問し資料の収集とヒアリングに努めた。今年2年目の23年度の夏に京丹後、京都(西陣)、博多、小倉を訪れ調査内容の充実を行った。絹織物産業(きのも、呉服)に関して川上(養蚕)から川下の小売りまでを全国の主要な産地を踏査することにより多くの知見を得ることが出来た。日本の伝統文化を象徴する「きもの」の歴史的な変遷を調査研究することは意義深いと感じた。

第1章：絹織物産業の概観

1. 絹織物(着物)を作るには桑園から始まり桑葉→蚕→繭→生糸→絹織物という幾つかの過程を経て反物が完成する。(図1)例えば、反物1つ(680g)を作るには桑園(約1.0a=30.3坪)を必要とする。

図 1



2. 絹織物は生糸または紬糸を用いた織物で精練を糸の段階で行う先練織物と織ってから行う後練織物がある。先練織物と主なものは「お召、銘仙、紬、帯など」、後練織物には「羽二重、縮緬など」があり後者のほうが多い。主な産地を生産量の多い順に挙げると丹後（縮緬）、西陣（帯、紋お召）、長浜（縮緬）、小松（縮緬）、福井（羽二重）、米沢（帯、袴）である。着物の種類としては、①打掛（縮緬、羽二重）、②襦袢（縮緬、羽二重）、③丹前（縞紬）、④振袖や留袖（縮緬）を挙げることができる。なお、世界の絹織物としては、中国のチャイナドレス、インドのサリーが代表格であろう。

* 事例研究

(福井の羽二重)

福井県の羽二重は桐生地方の技術を伝習したのに始まる。生糸売込商で横浜に行った坪田孫助は羽二重輸出の活況を目のあたりにして羽二重の製織を福井藩の機織り専業者三宅丞四郎に説いた。桐生からの製織技術により生産が増加し絹織物生産額シェアは明治18年の1.8%から36年には24.8%となり全国1位に躍進した。(表1)しかし、翌37

年の日露戦争を機にアメリカを中心とする欧米諸国の力織機の導入が進んだこと、アジアから生糸を輸入拡大し絹織物が増産して生産は停滞した。しかし、その後の第一次世界大戦の勃発は空前の輸出ブームとなり絹織物の生産額は大幅に増加し輸出額は日本の絹織物輸出額の6割を占めた。大戦後は、生糸の暴落と金融恐慌により機屋の倒産が続出した。

表1 福井県の絹織物生産額

単位：千円

	全国 (A)	福井県 (B)	全国順位	(B)/(A)×100
明治18年	3,743	68	10	1.8%
21年	11,091	377	7	3.4%
23年	12,632	933	3	7.4%
27年	32,538	5,466	2	16.8%
36年	35,318	16,175	1	24.8%
37年	68,180	22,351	1	32.8%

注1 「農商務統計表」による。

注2 全国順位が変化する年次のみ掲載した。

(出所)「50年史」福井繊維協会

3. 絹織物の生産・貿易形態を国際貿易の赤松理論を用いれば「雁行型発展」やバーノンの「プロダクトサイクル論」が適用できそうである。横浜開港の幕末・明治初期は日本の貿易は生糸を輸出して絹織物・綿織物を輸入するという後進国型の取引であった。その後、生糸は国内消費に向けられ戦後の高度成長期には「きもの」のブームが到来した。近年は「きもの」の需要が社会構造の変化や洋服志向から大幅に減少し、絹織物は絹の小物やネクタイとして海外に輸出されている。国内や海外の織物需要の減少は生糸の消費量の低下、養蚕農家の減少といった衰退の減少に陥り、一定の消費者の需要を満たし、海外に対し絹の国、日本をアピールするために仕方なく供給不足を補うために中国^(注2)やブラジルから生糸を輸入した。しかし、値段が高く、良品質ではない原料から製品を作るのは苦勞すると考えられた。

生産から流過程、消費者の一連の流れは国内と貿易では異なる。

(1) 国内の流れ

生糸生産→機織（機屋）→問屋→小売り

↑ ↑ *近世・江戸期の生糸商人は絹宿（絹仲介商）
（生糸商人） （買継商）

(2) 貿易の流れ

生糸生産者→生糸商人（荷主）又は藩専売→外国商人（外国商館）→輸出

↑
（売込商人）

（日本のきもの）

江戸末期に日本各地の大名は米穀中心の経済から特産物の経済に移行した。黒田藩の博多織、米沢藩の米沢織、紀州藩の有効絞りなどがあるが、これらの織物は大阪に集められ貨幣交換して大名の経済を救済した。絹糸や絹布の物資を加工販売したのは京都の室町の呉服屋であった。呉服屋の例として、三井呉服店（後の三越）がある。明治に入りこれらの呉服店は新製品の開発を行い紋織りお召、博多織りなどが流行した。又、明治以降の西陣織は急速に発達しイタリアやフランスの製品に劣らない高級な絹織物となった。

（生糸の生産地）

明治初めの生糸商人が向かった先は東日本では横浜のシルクロードからたどると東山養蚕地帯（上州、武蔵、甲府、信州、福島）が一つの例として挙げられる。又、西側では滋賀の近江商人が活躍した京丹後地方や長浜であった。特に長野県の上田・諏訪地方は周辺に養蚕農家が多くあったが、今回の現地訪問した桐生や足利の織物組合などからの説明によると現在は群馬県に1-2件の農家しか存在していないとのことであった。

3. 幕末の貿易

（生糸の輸出）

幕末の貿易は「横浜を中心に行われたが、横浜での貿易は生糸や茶などの原料・半製品を輸出し絹織物や毛織物を輸入する、いわゆる後進国タイプの貿易パターンであった。（表2）輸出の額でも生糸の割合が高く1980年の生糸輸出の総輸出額に対する割合は約65%と最大の輸出品目であった。生糸の輸出はイタリアやフランスの蚕病の流行と太平天国の乱による中国の生糸輸出の停滞により急増した。信州の諏訪や甲州の甲府などでは生産はマニファクチュア経営で主として座操織りであった。その後は器械製糸技術が導入されている。幕府は1860年（万延1）五品江戸廻送令を發布したが暫くして横浜に拠点を置く外国商館の反対圧力により廃止された。これは江戸の間屋を重視するもので横浜向けの生糸を一度、江戸の間屋に廻してから売込商人に渡るものであった。しかし、貿易の中心は横浜であり横浜での取引が再開され野沢屋や亀屋などの生糸売込商人の活動も始まった。生糸売込商人（売込商人）は生糸商人と外国商人の間に立つ貿易商人で国内の絹織物の流通を扱う織物買継商とは仲介交渉役という点で類似している。

（表3）は明治6年の主要外国商館と輸出先を示したものである。イギリス、フランス、スイス、イタリアなどの商館が横浜にありイギリスが多いことが分かる。輸出先はイギリスとフランスが顕著である。当時のヨーロッパでは生糸の需要が高まったが供給が飽和状態となった明治8年（1875年）アメリカの需要が拡大し日本からアメリカへの輸出は急増した。その額は全輸出の約4割を占める。

表2 幕末貿易の動向

	年次	全国・A	横浜・B(B/A)	横浜主要品目(対B百分比)					
				1 位		2 位		3 位	
輸	1860	千ドル 4,714	千ドル 3,954 (83.9)	生糸	65.6	茶	7.8	油	5.5
	61	3,787	2,683 (70.9)	生糸	68.3	茶	16.7	銅	3.6
	62	7,918	6,305 (79.6)	生糸	86.0	茶	9.0	銅	1.2
	63	12,208	10,554 (86.5)	生糸	83.6	原棉	8.9	茶	5.1
	64	10,572	8,997 (85.1)	生糸	68.5	原棉	19.9	茶	5.2
	65	18,490	17,468 (94.5)	生糸	83.7	茶	10.2	蚕種	3.8
出	1860	1,659	946 (57.0)	綿織物	52.8	毛織物	39.5	薬品	1.9
	61	2,365	1,494 (63.2)	綿織物	46.0	毛織物	26.7	綿糸	4.9
	62	4,215	3,074 (72.9)	金属	38.7	綿織物	19.4	毛織物	17.9
	63	6,199	3,701 (59.7)	毛織物	28.3	金属	21.5	綿織物	15.9
	64	8,102	5,554 (68.5)	綿織物	30.9	毛織物	29.2	綿糸	13.6
	65	15,144	13,153 (86.9)	毛織物	43.8	綿織物	35.8	綿糸	6.6

『横浜市史』第2巻(1959年)により作成。

(出所) 石井寛治「日本経済史」

表3 主要外国商館の国籍と輸出先

(単位 Bale)

商館番号	国 籍	輸 出 先		
		イギリス	フランス	そ の 他
蘭	8	フランス	1,068	
	63	イギリス	517	172
	90	ス イ ス	312	654
	180	ド イ ツ	116	31
	76	ス イ ス	434	696
	64	イタリア	69	104
	3	イギリス	625	
	202	イタリア	119	545
	35	イギリス	726	15
	177	イギリス	17	115
英	1	イギリス	277	
	30	不 明	869	

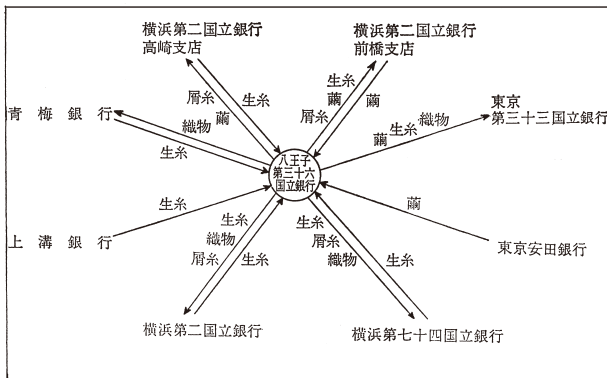
(出所) 西川武臣「幕末・明治の国際市場と日本」

4. 八王子の織物産業

「桑の都」である八王子はかつては養蚕農業として栄えたがその後は「織物のまち」として全国的に知られるようになった。^(注3) 明治における周辺の農村地帯では中山村の生糸、下恩方村の紬織、太織縞など絹織物産業について重要な役割を果たした。八王子(宿)においてこれらの商品が取引され、商品は八王子市場にとどまるか、あるいは八王子を経由して京都や横浜に送られた。特に横浜とはシルクロードである横浜街道を通し生糸などの貿易が行われたが、これらは明治政府の殖産興業政策に沿ったもので市場としては八王子は地理的にも恰好の場所であ

った。「八王子市史」によれば明治政府の勸業政策と生糸織物に繋がりについて金融制度を挙げている。(図2)と(表4)は荷為替の取引先銀行および取組関係を紹介している。八王子第36国立銀行と繭、生糸、織物の関係の流れである。明治政府によって明治5年11月に制定された国立銀行条例に基づく第36国立銀行は明治11年(1876年2月)に設立され、同年4月に八王子の横山町に本店が開設された。国立銀行としては第36番目である。なお、名称は国立銀行ではあるが民間の株式形態を取り正金兌換の銀行紙幣を発行する他に荷為替や手形割引による信用を供与している。融資対象内容には生糸や絹織物が多い。金融と生糸・織物産業は有効に機能していたと考えられる。八王子第36国立銀行は青梅銀行など8つの銀行と金融決済取引関係(コルレス)にあり荷為替や手形の割引に応じていた。八王子第36国立銀行の割引手形の内容も荷為替と類似し繭の生産、製糸、織物生産の過程で農家や機屋が資金調達をしていた。

図2 八王子の絹織物と銀行の関係(鳥瞰図)



荷為替の取引先銀行および取組み関係

(出所) 八王子市史

表4 絹織物と銀行の関係
(一部抜粋)

年 半 季 取 組	明 治 14 年	
	下 半 季	
各地取組先	当店より各地へ	各地より当店へ
横浜第二国立銀行	生糸・織物 円 175,910.	円
同 前 橋 支 店	生 糸 16,950.	
同 高 崎 支 店		
横浜第七十四国立銀行		
上溝銀行(1)		生 糸 6,470.
青梅銀行(2)		
東京第三十三国立銀行		
東京安田銀行		
計	192,860.	6,470.
打 歩 (日歩)	3厘~4厘	
手 数 料	$\frac{1}{1,000}$ ~ $\frac{1.5}{1,000}$	

(出所) 八王子市史

第2章：製糸業

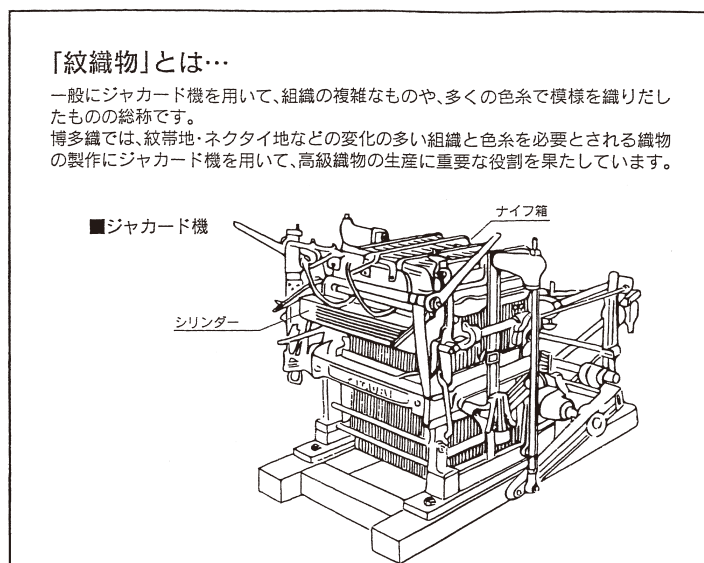
1. 長野県岡谷市

明治に入った岡谷は政府の殖産興業の一つとして奨励した様式器械製糸を取り入れ一大製糸業地に発展し「糸都岡谷」が世界に知られるようになった（生糸の生産は全国の25%）。生糸を作る方法として「手挽（てびき）」→「ざぐり」→「機械」（座操から立操、更に自動へ）へと続く。中山社の器械製糸工場では水車を動力として使用している。岡谷の製糸業発展要因はこのような製糸生産方法の機械化の他に周辺には地理的な条件に恵まれた養蚕地帯が散在していたからと言われている。生産された生糸は生糸（取引）商人に買い取られた。岡谷市教育委員会の資料「岡谷製糸業の展開」によれば、代表的な生糸商人として林八郎右衛門が活躍していた。岡谷に隣接している諏訪地方は生糸商人である近江商人（糸師）の中継地であり京都を中心とした機織産地と関東の桐生、足利、伊勢崎の機織地帯の中間と位置する。近江商人は主に京都や長浜に生糸を送っていた。

2. 群馬富岡市（富岡製糸場）

明治政府は殖産興業により富岡に官営の製糸工場を明治3年に設立しフランス人の技師ブリューナーによりフランス式の織機を日本式に改良して導入した。又、フランス人のジャコールが発明した紋織機ジャカードは明治7年（1874年）に政府がフランスから購入し模範工場を造り日本式に改良して普及させた。一般の工場に取り入れられたのは明治17年（1884年）頃からであった。高級品の西陣織や博多織に適しているという。（図3）京都から丹後へこの機械が持ち込まれたのは明治17年（1884年）であった。

図3 ジャガード機



（出所）博多織史

（富岡製糸場）

富岡市は平成17年に片倉工業（株）から建造物の寄贈を受け取り、その後平成19年1月にユネスコ世界遺産の暫定リストに掲載された。富岡製糸場は模範工場としての役割を果たしてきたが当時の工場の首長であったポール・ブリューナをはじめとする事績を視点にあてた報告書が完成した（富岡市教育委員会（2010））。富岡製糸場のお雇い外国人に関する（中間）報告書で、同報告書によれば富岡製糸場は創業からフランス人の影響を受け、フランスやアメリカの絹文化に貢献したという。その貢献の原点は首長の以下のような活躍である。①製糸場の敷地の決定、②製糸機械の発注と購入、③フランス人技術者の雇用と解雇、④工女の労働条件、⑤勤務医の雇用、⑥生糸の輸出業者の決定、であるが、筆者としては①、④、⑥が重要な点と判断した。特に④に関しては別の機会に詳述したい。更に、この報告書で興味深い点は当時の日本の今後の製糸業の展望として洋式器械製糸導入を提言していたことである。この提言は結果として、明治3年（1870年）に洋式器械製糸場の設立が決定している。もう一つの報告書は2011年に富岡市教育委員会が発行した「イギリス人のアダムズの日本の養蚕に関する調査」である。1869年の第1次から1871年の第4次までの養蚕研究である。注目すべき点は提言の部分で①富岡の官営の製糸場の設立によりブリューナはフランスの器械を日本人向けに小枠再操式の製糸器械として導入し、その結果、機械化が進み明治19年（1886年）に日本の産業革命の幕開けとなった。②上田地域の養蚕業に注目し20世紀は日本は養蚕大国になるであろうと提言している。両報告書とも養蚕製糸業の展望を描いた功績は評価できる。

第3章：絹織物産業と商人

1. 日本のシルクロードと生糸商人

生糸商人の買付け・販売活動（日本のシルクロードで活躍した罫水（やりみず）商人）

横浜開港の1859年から半世紀に及ぶ日本のシルクロード（八王子→罫水→横浜の浜街道）の役割とそこで活躍した生糸商人について述べる。シルクロードとは江戸時代の甲州街道中、最大の宿場町であった八王子と最大の貿易港をもつ横浜を結ぶ道である。1853年にアメリカは江戸幕府に対し開国を求めて以来、横浜は生糸貿易の代表的な貿易港となった。生糸の生産は当時、関東の北峰の上州（群馬県）、武蔵（埼玉県、東京）、甲州（山梨）、信州（長野）などでこれらの地域を東山養蚕地帯と呼んだ。横浜は他の港（長崎、箱館）よりも生糸の輸出の点で地理的に有利な条件をもっていた。当時の貿易に占める横浜の比率と輸出に占める生糸の割合は（表-2）の通り前者は開港の翌年の1860年以降70-80%の高い比率を持っている。一方、後者の生糸比率は年により変動があるが平均70%台の高い水準で推移していった（輸出は横浜、横浜は生糸から生糸は横浜なり）。東山養蚕地帯と横浜のルートは多くあったが最も重要な道はこの浜街道であった。当初は八王子-神奈川ルートであったが1860年の「五品（生糸など）江戸廻送令」により八王子→原町田→横浜ルートが利用されるようになった。八王子はもともと

江戸時代から生糸の取引が盛んに行われ、ており生糸を取り扱う商人が活躍していたこと、生糸商人は生産者のもとに出向き生糸を買い集め、これを横浜に積み出す仕事（浜出し）をしていた。積荷の移動には荷車や馬車が利用されていたのである。浜街道の途中には鎌水峠があり鎌水の集落には八王子を中心として広い地域で生糸商人として活躍した財力のある農民が鎌水商人の活動をしていた（平本平兵衛、大塚徳左衛門など）。鎌水商人が横浜で生糸を輸出するためには横浜にいる売込商人の支援を必要とした。売込商人は現代の総合貿易商社の機能と活動に類似している。輸出に際しては横浜のイギリス人などの外国商人と取引交渉をしなければならない。従って、八王子での生糸生産→鎌水商人→日本の売込商人→外国商人→欧米への輸出の構図が見えてくる。なお、東山養蚕地帯の中で重要な生糸産地であった富岡、前橋、桐生などの生糸も八王子に出る道を利用し浜街道に入ったといわれている（JR八高線ルート）。又、埼玉県の秩父地方の生糸の販路として八王子を通過する道がある。つまり、八王子は「中継地」の役割を果たした。しかし、1860年の「五品江戸廻送令」により生糸を直接に江戸問屋に運ぶべしとなり、これが鎌水商人の没落と浜街道の衰退へとつながった。又、1889年の甲武鉄道（JR中央線）の八王子までの開通と1908年（明治41年）の横浜鉄道（JR横浜線）の開通により浜街道の役割は終了した。八王子は多摩の横山、桑の都と呼ばれ桑の葉が数百年昔にあり農家の副業として機織りという副業が生まれた。なお、浜街道は横浜への生糸輸出ルートだけではなく横浜からの輸入ルートとしても使用され西洋の製品や文明が流入し周辺の地域開発に貢献した。八王子は関東では足利、桐生と並ぶ三大絹織物産地で天保年間（1830-1843年）には桐生、足利の専門化している機屋の影響を受けて専門の機屋が登場した。明治32年には「機屋側」と「買継商側」^(注4)との代表により『八王子織物同業組合』が設立され、品質検査の励行、販路の拡張を図った。

2. 織物買継商（買継商）の活動

（事例1）足利の買継商

買継商とは一般に各地の織物問屋の委託を受け一定の口銭（手数料）をおさめ（収め＝受取り）、自己の名において機屋より織物の買い付けを行う。単なる仲買とは異なり、常に自己の計画により織物の見込み買いをして問屋の注文に従って絹織物を仕送る。その起源とは織物の発展により、それが買継商の進出を促し、又、その後における買継商の資力が織物業における主導性を発揮した。買継商はその傘下に機屋を従えつつ着々とその資力を蓄積してきた。買継商も自ら直接に織物生産に携わることも多かった。又、有力な機屋も自ら買継商を兼営することもあった。この様に、買継商は織物業において極めて大きな発言力を持っていたと同時に金融機関や銀行の設立に努力した。足利の場合には足利銀行の設立や鉄道建設に協力している。

足利市場に関係する買継商は足利の町在住の他に桐生や佐野からの買継商を含めて毎年

20名程度が活動していた（明治30-40年頃）。口銭については「買継商組合規約」により以下の通りであった。

* 1か年買収高

金1万円未満：1分8厘

金1万円以上3万円未満：1分5厘

金3万円以上：1分2厘

（事例2）米沢の買継商

米沢史（資料編5）-山形県内機業（米沢織物）の資料によると、
（染色業者と機屋の関繋）

『歴史に於いて本邦織物の「京都西陣織」と東西相対してもっとも光栄ある「米沢織物」が今日の如く盛運を極る所似のものを観んと欲せば、先づ染業者と機屋との関けいに就いて研究を要するなり。染業者は主として絹糸染に従事し而も機業家の督促に堪えうる能わざるの盛況を極む。然れど「米沢織」の弱点は実に此の染色の不完全さに在ると以て、』
→これは米沢織の弱点（課題）が絹糸の染色であったことを指摘している。

（機業家と買継商との関繋）

『往時、米沢藩に於いて国産役場を設けて当事者を奨励せられたるの時は。上（かみ）に「もの師」なる物ありて総ての原料を整え、御用商人即ち当時の買継商をして機業家にお蔵しめ以て公用に多忙なる士分（すなわち当時の機業家の主人公）の手を煩わさざらしめたる情態を描出すれば次の如し。』
→これは物師（上の窓口）と機業家との仲介役をする買継商（御用商人）の役割を説明している。又、江戸や京都の間屋の仲介役も行ってた。



（買継商と機屋の取引）

買継商は問屋の注文によって買い付けを行っている。機屋に対しては「買継手形」を発行、機屋は原料・糸商などへの支払に充てた。又、買継商は東京あるいは大阪の間屋が振り出した「問屋手形」により「買継手形」の代払いをしている。（輸出向け織物の取引方法は現物取引及び委託取引であった。）「日本下層社会」の筆者である横山源之助は「買継商と一般機屋との関係は封建時代の君主の如き」と厳しい見方をしている。買継商は機屋と問屋の間に立ってその売買を助け、又、機屋に対しては売買の当事者となる製品の代金は

買継商が一度支払うこととなる。それと同時に、問屋から一定の口銭を受け取ることとなる。^(注5)

(買継商と問屋の関繋)

『予の所謂買継商とは米沢市に在りし名機業家より直接に購入する者を謂い、問屋とは京都及び大坂、名古屋、東京にあり「米沢織物」を小売商または需要者にひさぐものを謂う也。買継商は、多く関西関東の問屋と関係を有し、問屋より或縞柄の標本に由りて注文を請け、若しくは自己の認識を以て幾柄の貨物を発送しつつありと難も、能く基の心術を解剖すれば憂うべきの事項亦すくなからず。之れを内にしては買継商が微々たる小機業家に対し或る標本を以て製造せしむるの間、過酷なる算盤に由り困しの自己の利益をもに計りし、ごうも憐れむべき小機業家を遇するの道を尽さず』

→これは買継商が問屋と小機業家との間に立つ商売の状況を記述している。現代のセールスマンにも共通する所が多い。利益を徹底的に追及する典型的な商人像が描写されている。

(機業家の職工-工女の役割と労働)

『3,500余の工女は実に米沢の花にして「米沢織物」の賢母なり』と工女の役割を讃えているが、一方では以下のように過酷な労働を強いられている。『花はづかしき妙齡の処女は午前7時より誰そ彼時に至る迄、ちようちようたる身をジャガード台上にもたれしめ、かつかつたる響きの下に、…1か月に3反より5反6反の美なる「米沢織物」を産出し、1反80銭、即ち1機3円20銭の報酬を得るにして至り』

(米沢の品目別生産動向)

呉服の品目別生産動向(昭和53年の対昭和49年比、数量ベースで比較)によると米沢織物は男物着尺、男帯などが国内需要の減少に伴い急激に生産が低下している。特に、白生地生産の減少が目立っている。

3. 生糸売込商人(売込商人)の貿易活動

生糸の生産地から購入した生糸を輸出のために横浜に送り出す商人が生糸商人であるのに対し生糸商人と横浜の外国商館との間に立ち大量の生糸の輸出に携わった商人は生糸売込商人(売込商人)と呼んだ。一方、貿易商人でも輸入を扱う商人は取引商人と言う。明治12年における三大売込商人は(表5)の通り「野沢屋」「亀屋」「吉村」で売込商人は荷主(地方の生糸商人)から預かった(委託販売)生糸を外国商館への売込み手数料(口銭)を受け取っていた。手数料は荷主から生糸の販売に応じ、当事者間の規則書によれば売込額の1%程度であった。手数料の受け取りの流れは国内の織物取引で買継商が機業屋から消費地である問屋-小売の流通ルートの作業過程で売った時に手にする口銭と類似している

表5 明治12年の売込量
(単位 斤)

No	売込商名	売込量
1	野沢屋惣兵衛	654,005
2	亀屋善三郎	310,207
3	吉村屋幸兵衛	302,839
4	外村両平	247,258
5	若尾幾造	122,060
6	三井物産	117,668
7	郡内屋四郎左衛門	109,624
8	小島源次郎	90,328
9	野沢屋忠兵衛	46,066
10	平沼専蔵	42,408
11	芝屋清五郎	35,826
12	田辺屋	18,675
13	萩野	17,550
14	田中平八	15,525
15	小橋屋	10,350
16	萩由	10,012
17	京屋	8,268
18	大橋屋	4,331
19	小西	2,643
20	村島	2,362
21	米沢屋	2,193
22	田巴屋	1,968
23	丸山	1,912
24	川喜田	1,012
25	その他10軒	4,159
26	その他・不明	13,668
合	計	2,192,917

『横浜毎日新聞』より作成。

(出所) 表3と同じ

又、類似点では売込商人が金融機関（国立銀行など）から資金を借り生糸商に前貸しする点でも買継商が自己資金あるいは銀行からの借入れにより絹織物の代金を機業家に支払う流れと似ている。売込商人は幕末には120軒以上あったと言われるが（表4）のように上位数軒で売込の大半を占めている。ビジネスとして現在の三菱商事や三井物産などの総合商社の原点と考えられる。西川武臣「幕末明治の国際市場と日本」によれば、このような売込商は開港後も生糸貿易に注目していた諸藩-紀州藩、合津藩、上田藩などとの生糸の結びつきが活発であった。周辺には大仁田、安中、富岡、上田という生糸の大生産地が控えていた。しかし、この体制は1878年（明治4年）の廃藩置県により終局した。明治の初期における売込量を産地別をみると陸奥・出羽、信濃、上野が御三家であった。仮に売込量を消費量と置き換えてみた場合、現在の生糸消費地は（表6）で示されている。これから明治初期の消費地（生産地）とは異なる地方がみられる。京丹後^(注3)や西陣の2つで全国の半数を占めていることが分かる。その理由と

表6 日本の絹織物の状況
(生糸消費、産地、用途)

1. 主要産地の生糸消費高(平成12年)

産地名	順位	俵数	構成比 (%)	前年比 (%)
丹後	1	22,397	28.8	84.3
西陣	2	18,241	23.4	88.2
長浜	3	4,771	6.1	90.6
山梨	4	4,140	5.3	99
福井	5	4,026	5.2	101.5
五泉	6	3,921	5	87.9
福島	7	3,536	4.5	120.6
小松	8	2,263	2.9	97.6
米沢	9	1,569	2.0	95.6
八王子	10	1,534	2	99.9
計		67,015	86.1	90.3
その他		10,798	13.9	89.4
合計		77,813	100	90.2

2. 産地別、用途別絹織物(交織を含む)生産高(平成12年)

産地名	輪織 (千m ²)	和装用				先染着尺 (千反)	帯 (千本)	小物	洋装用 (千m ²)	洋品雑貨			装飾用 (千m ²)	夜具 前座布団 (千反)	工業用 (千m ²)
		白生地								ネクタイ (千m ²)	マフラー・スカーフ (千m ²)	その他 (千m ²)			
		表地 (千反)	裏地 (千反)	長襦袢地 (千反)	計 (千反)										
鶴岡	24							104	26	65					
長井						5									
米沢	322	1			1	67	23	2千反	394	54	53				
福島県	292		279		279	11		102千m ²	10	34	1,318	298			
本場結城						7									
石下結城		2			2	35	1	1千反							
足利内地						3	1								
桐生(内地)		2			2	9	198								
桐生(広幅)									9	179					
群馬生絹			122		122										
伊勢崎						14									
秩父						2									
埼玉			73		73										
村山						1									
八王子						10			9	504	7			4	
神奈川県									707	1,095	198		111		
山梨県						4	2			8					
長野県		1			1	42									
十日町															
五泉		231	19	1	251		40	3千反							
加茂		15			15			1千反							
塩沢						8									
小千谷						18									
城端				15	15							175		2	
石川県(金沢)	367	10	14		24			39千m ²	40	290	2	1			
小松	388		9	95	104			11千反	495	116					
根上	56	1		18	19				48	79					
加賀			6		6				231	146					
春江		2	50	86	138										
福井	52		605	14	619			2千m ²	468	3	80	8	175	1	3
浜松		9	12		21	29									
中屋		9	1		10			1千反				103		34	
長浜		309			309										
西陣		13			13	112	1,494	29千m ²	1	1,143	1	429	61		
丹後		964	53	148	1,165			185千反	1,538						
但馬		59		5	64			70千m ²							
博多							211								
久留米						-0.1									
都城						1									
鹿児島						70	1								
奄美大島						37									
沖縄						7	2			1					
合計	1,501	1,629	1,243	382	3,254	492	1,973	204千反 242千m ²	4,054	3,219	2,237	308	883	173	43
前年度	1,404	1,946	1,465	253	3,663	568	2,173	214千反 273千m ²	3,882	3,599	1,361	428	831	208	42
前年比(%)	107	84	85	151	89	87	91		104	89	164	72	106	83	102

※八王子のシェア ⇒ 和装用先染着尺:2%、和装用:0.2%、ネクタイ地:15.7%、マフラー・スカーフ地:0.3%、工業用:9.3%
 ※2002年時点で、輸入ネクタイは約2400万本(80%以上が中国産)、国産は1500万本 ⇒ 60%以上が輸入ネクタイで占められている。

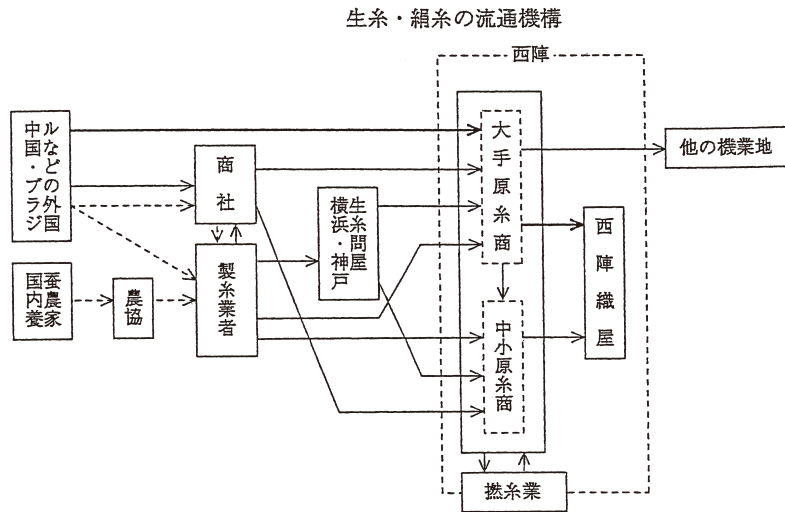
上記の1、2とも(出所)独立行政法人農畜産業振興機構による実態調査

して国内での生糸生産が減少し中国やブラジルからの輸入に依存していること、生産は輸出よりも国内の絹織物（きもの、呉服）が内需に向けられていることであろう。

第4章：現在の絹織物の流通過程

現在の生糸・絹糸の流通機構と「きもの」の流通機構を示したのが（図4）である。京都の西陣を例として取り上げている。^(注6) 明治初期の比ると商人の変化が明らかで、前者の場合、生糸商人の代わりに「商社」の役割が大きい、後者の場合、流通ルートは多様化している。買継商がなく産地問屋がその役割を担っている点に注目したい。西陣の機屋から直接に室町専門問屋を通さずに地方の問屋や百貨店・呉服店に織物を納入している場合もある。又、産地問屋が自己のチェーン店を利用して消費者に商品を販売している。なお、この章に関しては次回に詳述することとする。

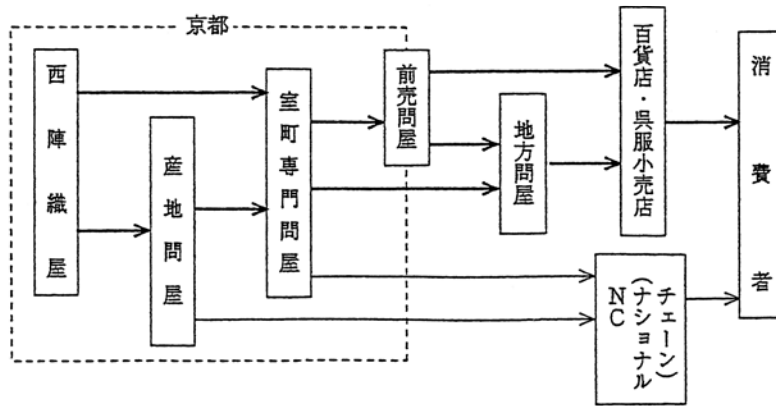
図4-（1） 生糸・絹糸の流通機構〔西陣織〕



- (注) 1. ———> 線のうち外国から輸入された場合、生糸と絹糸の2種類の原糸を示す。
 ———> 線のうち国内乾繭を製糸された場合、原糸面までは生糸を、原糸商からは絹糸をそれぞれ示す。
 ----> 線は乾繭を示す。
 2. 各線の太さは流通量の目安を示す。
 3. 西陣地域を示す線が業種の枠を横切っている場合は、該当業種が西陣地域内と西陣地域外に存在していることを示す。

(出所) 京都西陣織物組合資料

図4-(2) 帯地・「きもの」の流通機構〔西陣織〕



(注) 1 → は主たる製品の流れを、——→ は従たる製品の流れを示す。もちろんこれ以外にも少ない製品の流れはある。

(出所) 同上

おわりに

本論文は幕末から明治にかけての生糸と絹織物に関する生産と消費動向と、それに関わる人物を通じた活動を考察したものである。当時は生糸輸出の全盛時代であり明治政府もこれを奨励していた。このような経済状況の中で生糸産業や絹織物産業の発展に貢献してきたと考えられる3つのタイプの商人の活躍は評価できる。織物産業の流過程では最初に登場するのが「生糸商人」、次の過程では「買継商」、最後に登場するのは「売込商人」である。これらの商人の役割は貿易商売と国内での販売との相違があるが、専門知識を活用した仲介取引により口銭を受け取る点で共通していた。生産後の交渉や販売により消費者に到達する役割を担う。貿易では養蚕-繭-生糸-生糸商人-売込商人-外国商人(商館)-輸出-アメリカ・ヨーロッパ、という流れ、又、国内の絹織物生産では養蚕-繭-生糸-機織-機業家(機屋)-買継商-問屋-小売店-消費者の流れの構図により商人の存在位置が明確となった。織物産業の生糸に焦点を当て幕末・明治の時代を考察してきたが、(はじめに)で述べた通り、今回の日本の近代化と織物産業(2)として戦後の絹織物産業が日本の経済発展に果たした役割と絹織物産業の栄枯盛衰を調査分析し、又、現地調査をした地域の中で1箇所を選定し一次資料の徹底分析を試みる計画である。なお、今回は日本のシルクロードの内容と役割を盛り込んでおり研究内容を充実させた点を強調したい。最後に、現地調査を通してシルクの愛好家^(注7)の増加を望む声が多いことを痛感した。絹織物のまち、八王子で育った筆者も「きもの」の愛好家として喜ばしいことである。又、現地調査のために研究内容に賛同し多大な協力をして頂いた市長や行政当局(県庁や市役所)更に、多くの全国の絹織物産業関係者(織物工業組合など)に感謝の意を表したい。

【注】

1. 現地調査によると、主な原因は①高い、②一人で着れない、③着る機会が少ない、の3つであった。
2. ヨーロッパでは19世紀に絹の50%を自給していたが、20世紀（1902-1904の年）に入ると需要の輸入依存度が高まり、主な輸入先は中国（27%）や日本（28%）であった。その後、1920年以降は日本が大半のシェアを占めた。
3. JR八王子の駅前には「織物のまち八王子」の塔がある。近世の八王子は織物の生産が盛んで「八王子縞」の絹織物（先染め）は江戸の町人の中で需要が増し生産が増加した。その後、明治における生糸取引も拡大したが、戦後は最盛期を迎えた後に養蚕→機織→販売の流通面で衰退している。現在の絹織物業界は日本各地の「きもの」需要が減少し、織物の生産は低下したために機屋、買継商、呉服店が縮小し以前のような活気が失われている。八王子織物組合の責任者によると「八王子の戦後の織物最盛期には1日ガチャンと織れば万と儲かることから「ガチャ万」という言葉が流行した」と言う。「今はネクタイや絹の小物の生産に力を入れ絹織物産業は生き残っている」ことから「きもの」生産の衰退の現状を嘆いていた。
4. 岩崎（2010）は近世後期（元禄以降）の八王子（武蔵国多摩郡八王子町）には「縞買」と言う在郷商人（中野久次郎の例）が集荷した絹織物（八王子縞）を江戸の呉服問屋や近江商人に販売していた。織物買継商の原点と考えられ営業形態が類似している。同5頁で縞買の営業形態を挙げている。①江戸の大呉服屋の代買、②江戸の中小呉服屋への販売、③直接、生産者からの買い付け、小売や素人への販売、④近江商人の買継。又、同3頁、16頁で当時、江戸の三井越後屋（三井呉服店）が八王子に置宿（現地の縞買）を設立し、縞買は八王子の絹織物を三井越後屋に送り一定の口銭を受領していた。江戸ばかりでなく、西側地方においても近江商人との取引により同様に口銭を受け取っていた。
5. 近世の金融と流通に関しては松石（1993）が参考となる。「近世における上州絹の流通増大の中で都市の大問屋が「買宿」と呼ばれる在郷商人（古沢清左衛門の例）に対し多額の仕入れ資金を前貸しし、商品の買い付けを行うことで生産部門の支配を強めた。
流通構造は以下の通りとなる。
「在方農民（絹生産者）→小仲買的商人→絹売宿→都市大問屋」
6. 京丹後の白生地（後染め生地）は西陣に送られ着物として製品化されることが多い。
7. 最近、京丹後市が幹事となり各地のシルクの生産地を会員とするシルクのまち委員会を立ち上げた、参考資料C-4の全国シルクのまち情報誌「知るく」がシルクの普及向上のために発行された。小生もシルクの愛好家であり関係機関とは協力していく所存である。

（参考文献・引用文献）

A. 史誌関係

1. 「八王子市史（下巻）」八王子市役所、昭和42年3月
2. 「八王子織物史（上巻）」八王子織物工業組合、昭和40年7月
3. 「組合史」（丹後織物工業組合60年史）丹後織物工業組合、昭和56年10月
4. 「博多織史」博多織工業組合、平成20年10月
5. 「50年史」（社）福井県繊維協会、平成12年11月
6. 「きもの十日町50年の歩み」十日町織物工業協同組合、昭和60年11月
7. 「米沢史」（資料編5）米沢市役所、平成10年3月
8. 「足利織物史」（下巻）足利市役所、昭和35年3月

B. 文献・論文

1. 龍村 謙（1966）「日本のきもの」中公新書

2. 竹村健一（1983）「日本人は絹を見捨てていいのか」実業之日本社
3. 岡谷市教育委員会（1994）「製糸ふるさとの歴史 製糸業」
4. 石井寛治（2006）「日本経済史」（第2版）東京大学出版会
5. 馬場喜信（2001）「浜街道—（絹の道のはなし）」かたくら書店新書
6. 西川武臣（1997）「幕末・明治の国際市場と日本—生糸貿易と横浜」雄山閣出版
7. 佐藤 弘（2009）「日本資本主義と地域産業」時潮社
8. 数納朗ほか（2009）「絹織物産地の存立と展望」農林統計出版
9. 市川孝正（1996）「日本農村工業史研究 桐生・足利織物産業の分析」文眞堂
10. 岩崎清美（2010）「武州八王子に見る地域市場の展開—八王子縞買の同好を中心に—」（『千葉経済論叢』42）
11. 松石泰彦（1993）「幕末期西上州にける絹商人と絹流通—開港前段階での富岡周辺を中心に—」（『地方史研究』43-5）
12. 長谷部弘（1982）「近世後期における生産流通構造—信達地方の生糸買次商人—」（『研究年報経済学』44-3）

C. 報告書等

1. 小泉勝夫（2006）「蚕糸業史—蚕糸王国日本と神奈川」
2. 富岡教育委員会（2010）「富岡製糸場のお雇い外国人に関する調査報告」（中間報告）
3. 富岡市教育委員会（2011）「日本国の養蚕に関するイギリス公使館書記官アダムズの報告書」
4. 全国シルクのまち情報誌「知るく」No.1（平成23年1月）、No.2（平成23年6月）
5. 西陣機業調査の概要（西陣機業調査報告書）第18次西陣機業調査委員会、平成19年3月
6. 同上 第19次西陣機業調査委員会、平成22年3月
7. 西陣生産概況（平成22年）西陣織工業組合
8. 第7次西陣産地振興工業ビジョン（平成23年4月）西陣織工業組合
9. 京丹後市織物実態統計調査（平成20年12月）京丹後市

（平成23年11月9日受理）